

## O2-010

**「子どもの健康と環境に関する全国調査」  
大阪ユニットセンターの医学的検査採血場面  
における児の心理的混乱の関連要因の検討**

江口 静香、岩上 浩美、田島 真知子、  
佐藤 拓代

大阪母子医療センター 母子保健調査室 エコチル調査室

**【目的】**

「子どもの健康と環境に関する全国調査」(以下「エコチル調査」)では全体調査と5%を対象とした詳細調査が行われているが、大阪ユニットセンター(以下「OUC」)では、詳細調査の精神神経発達検査と医学的検査を集団検診で実施している。採血検査では局所麻酔剤を使用し身体的苦痛の軽減を図るとともに、プレパレーションをはじめとする心理包括的支援を行っているが、同じ支援を提供しても心理的混乱に違いがあり、子どもの心理的混乱の関連要因を検討することを目的とする。

**【対象者/方法】**

OUCの詳細調査に参加した3歳11か月～4歳3か月の137名を対象とした。Manifest upset scale・Cooperation scaleから、Manifest upset scale3またはCooperation scale3に該当する児をPSYchological upset(以下「Upset」)、それ以外の児を「Normal」に分類し、2群間で比較検討した。検討因子は、発達指数(新版K式発達検査2001。以下「DQ」)、連絡方法(電話・メール)、プレパレーションブック(未読・既読)、リハーサル(拒否:有・無)、採血時の抱き方(コアラ抱っこ・クマ抱っこ)、局所麻酔剤(有・無)、入院歴(有・無)、手術歴(有・無)である。なお、エコチル調査は環境省等及び当センターの倫理委員会の承認を得ている。

**【結果】**

発達指数(姿勢-運動、認知-適応、言語-社会、全)のt検定では、2群間で有意差は認められなかった。発達指数以外の因子の $\chi^2$ 検定では、連絡方法、リハーサルで2群間に差が認められた。連絡方法では、Upset群の方がメールによる手段をとっていた(メール:Normal群 26.4%、Upset群 45.5%、 $p<0.05$ )。リハーサルでは、Upset群に拒否傾向がみられた(拒否有:Normal群 2.4%、Upset群 36.4%、 $p<0.001$ )。

**【考察】**

採血検査の反応ではDQとの関連がなく、支援が概ね効果的に作用していると考えられた。一方、連絡方法とリハーサル時の拒否傾向には関連が示唆され、直接保護者とコミュニケーションがとれていない場合、拒否傾向がみられる子どもに対して不安が軽減できていない可能性が考えられた。集団検診における心理包括的支援では、特に保護者との連携が不可欠である。今後はメールで連絡をとる際のコミュニケーションのあり方、また保護者の背景にある要因を探索的に検討していきたい。

本研究は環境省のエコチル調査に係る予算の一部を使用した。